註

1．一覧表の作成にあたり、次の資料を参考にした。
『施設ガイドブック』全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会編　1989
『埋蔵文化財センター等における啓蒙普及活動に関するアンケート集計結果』財団法人栃木県文化振興事業団　1990

2．鶴田総一郎「博物館学の方法」『博物館学入門』理想社　1956
品田　穣「博物館展示」『博物館研究』Vol. 34, No. 5　1961　など

3．「生涯教育」の考え方は教育制度の改革につながる方策を含み、「生涯学習」は自発的な意思に基づく学習権の視点を重視したものと理解している。展示活動においては見学者の立場に立って、「生涯学習」の観点から検討されるべきであろう。

4．「生涯教育について」1981．6．11
「生涯学習の基盤整備について」1990．1．30

5．Paul Lengrand（波多野完治　訳）『生涯教育入門　第一部』財団法人全日本社会教育連合会　1970
Paul Lengrand（波多野完治　訳）『生涯教育入門　第二部』財団法人全日本社会教育連合会　1975

6．伊藤寿朗「地域博物館の思考」『歴史評論』7　校倉書房　1990

7．下津谷達男「情報発信基地の博物館」『国府台』3　和洋女子大学博物館学研究室　1992

（本学専任講師）

るものとなる。例示した富山県埋蔵文化財センターでは、いずれの企画展においても動線の最後に「体験コーナー」を設けた。「石の道具」展は石庖丁のレプリカによる稲穂つみ、「鉄」展はマイギリ式による火おこし、「鉄の文化」展では玉作りの一工程である竹ひごによる滑石への穿孔の体験である。小部門ではあるが、見学者のほとんどが挑戦していた場である。学習面からみれば、大掛かりな「考古学教室」や「体験教室」を開催するよりも、効果的と考えられる。

おわりに

埋文センターが収蔵する資料は、管轄する域内から出土したものである。そこで、収蔵する資料を最も有効な方法で展示に利用しようとするならば、自ずと地域の歴史や生活に迫る展示となる。考古や歴史に関する学習の場としての位置付けに重点を置いた埋文センターの展示活動は、対象とするのはあくまでも地域である。地域を志向して、地域住民の自己教育力の育成に貢献することを勤めなければならないのである。

埋文センターにおける展示活動は、開設の経緯からみると、本来の業務の副次的産物である。したがって、展示活動をめぐる条件は必ずしも整ってはいない。この点も今後補っていかなければならないことである。１例をあげれば、施設の立地は見学者の来館に配慮されていない。そのため展示室を開設しても入館者数が延びない場合が多い。巡回展を開催すれば大勢の見学者が来るにもかかわらず、センター内の展示は閑散とした状態なのである。埋文センターが展示施設として、社会的に広く認知されていないことに原因があると考えられる。こうした不利な条件を克服するためには、PRや広報活動も重要となる。そして、それ以上に、埋文センターの特色を生かした人々を引き寄せる展示活動を工夫しなければならないのである。

以上、埋文センターにおける展示活動の現状を把握し、その課題について若干の検討を加え、今後の方向性を探ってみた。これからの埋文センターでの展示活動は、半ば発掘資料の収蔵庫と化している多くの市町村立の歴史系資料館に対しても、今後の指針を示すものとなろう。

最後に、展示活動を実践することができた富山県埋蔵文化財センターでは、当時の奥村宏所長、桃野真晃副所長（現所長）をはじめとする職員諸氏や、富山県教育委員会文化課の方々から、様々な御指導をいただいた。衷心より御礼申し上げる次第である。

い。

富山県埋蔵文化財センターにおける経験では、自己の居住する地域（極めて狭い範囲）やその周辺から出土した資料に対して、見学者は特に強い興味を持つようであった。いずれの企画展でも、動線の終末部分に展示資料の出土遺跡の一覧表と分布地図を掲示したところ、ほとんどの見学者は足を止めて見入っていた。中には、分布地図から自分の住む地域にある遺跡を見い出し、導線を戻ってその遺跡からの出土資料を探し出し、熱心に観察する人も少なくなかった。それが土器の小片や１点の破損した石鏃であっても時間をかけて丁寧に観察し、資料の発する情報を探るように前後の展示遺物やパネルに目を配っていた。身近な生活圏での事柄に対して、知識欲求は特に強いようである。したがって、できるだけ広範囲で多くの遺跡から出土した資料の展示に努めるならば、見学者が興味を抱く身近な遺跡の出土遺物を導入として、展示の展開に引き寄せることができる。資料の多くは破損品であってもよいのである。全体像の分かる中心的資料を後ろ盾とすることによって、破損品も十分に生かせることになる。このような展示ができるのは、多量の遺物を収蔵する埋文センターの利点なのである。

資料に直接触れることが可能な場を設けることも、膨大な量の資料を収蔵する埋文センターの利点を生かした工夫の一つである。実物資料を自由に手に取って観察できるようにすることは、資料の破損や盗難などを考えると躊躇せざるをえない。文化財保護の機能を前面に出す埋文センターでは、特に慎重な姿勢となる。しかし、盗難に対する管理ができ、破損しにくい資料や破損しても修復が比較的容易な遺物であれば、手に取って観察できるコーナーを設置してもよいのではないだろうか。全ての遺物はそれぞれ固有の価値を有しており優劣は無いが、保存や将来の研究に寄与する価値にも増して、多くの見学者が触れて学ぶ学習に寄する方に、より高い価値を見い出せる資料もあると考える。

石庖丁による稲穂つみの体験コーナー
（富山県埋蔵文化財センター「石の道具」展）

展示の中に体験学習のできる場を設けることも、学習効果を高め

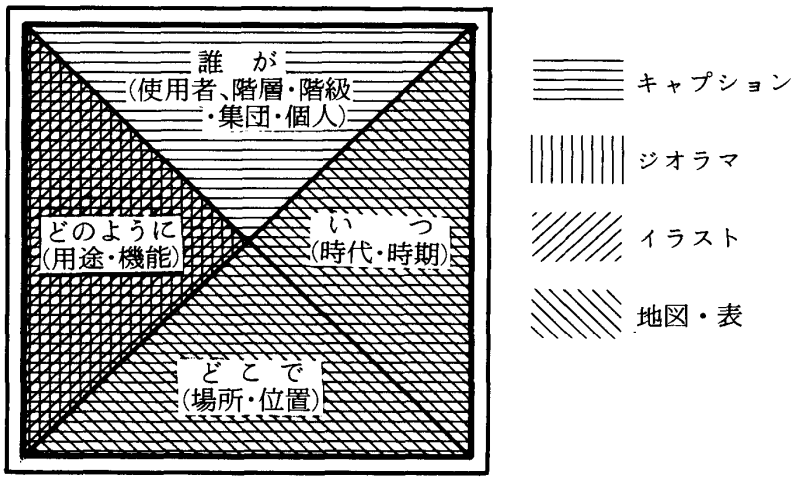


図4　資料に対する基礎的情報とその主要な提示法

つ（時代・時期）、どのように（用途・機能）の4点を、キャプション・ジオラマ・イラスト・地図・表などで効果的に提示するならば、見学者にとって自発的な地域学習の契機になると考えられる。情報の提示手段としては、キャプションは全ての項目に通用し、ジオラマやイラストは用途や機能に、地図や表は時代・時期と場所・位置に対して有効性を発揮する（図4）。さらに、参考文献として報告書名を記しておけば、学習へのとりかかりを促すこととなる。仙台市立博物館では考古部門のキャプションに報告書名を記載し、この報告書は誰にでも利用できる図書室に備えられており、利用者は必要に応じて手軽に原情報を入手できるという[7]。埋文センターには発掘調査の報告書は必ず置かれているため、是非とも実行すべきである。

資料の量が膨大であっても、形状がほぼ保たれているいわゆる完形品は少ない。しかし、破損品であってもその資料から発せられる情報量は、完形品と比較して遜色はない。問題となるのは、展示における視覚的効果の面である。例えば、1点の完形品を中心的資料として配置し各遺跡の破損品を並べるならば、視覚的な効果を高めつつ多くの資料を提示することができる。多くの資料を提示することは、見学者による比較検討が可能となる。ここでいう中心的資料というのは、用途や機能が視覚的に理解しやすい資料という意味であって、必ずしも展示内容の中心になるものではない。内容としては破損した小片が展示の主体で、中心的資料は参考資料に位置付けられることもあり、実際はそうした場合の方が多いであろう。中心的資料となりうる遺物は、極めて限定されてくる。そのため、テーマの異なる企画展示においても、展示の意図に合わせるかたちで出品されることになる。中心的資料となるものは展示への使用頻度が高くなるために、展示環境や保存方法について注意しなければならな

生涯学習の視点からの展示が必要であるとした。生涯学習への取り組みや活動はまだ緒についたばかりで、現在は生涯学習の環境整備とともに、生涯学習に立ち向かう人間の育成の段階と考えられる。例えば、学校教育においては自ら主体的に学ぶ児童や生徒の育成が求められている。そこで、博物館をはじめとする展示施設が、生涯学習に対する役割の一端を果たそうとするならば、展示に自発的な学習の契機を提示するための工夫が必要となる。残念ながら、埋蔵文化財やその行政に対する啓蒙に重点を置いた現在の埋文センターの展示は、自発的な学習を促す配慮に欠け、全体的に教示的傾向が強い。教示的な展示は啓蒙には有効であるが、学習意欲の向上にはつながりにくい。

伊藤寿朗氏は地域博物館における教育の目的を、「モノシリの養成ではなく、自己教育力の育成」で、「それは、客体としての受身の学習者から、自分の力で自分の学習を組みたて、発展させていくと言うことである。そして博物館は、自己教育の担い手へと、成長・転化していく過程をうながし、またつつみこみ、保障していくと言うことである」と定義されている(6)。学習機能の充実を目指した埋文センターの展示目的も、自己教育力の育成について配慮し、独自の特色を出した内容や方法を創造しなければならない。

次に、展示の内容や方法について具体的に考えたい。

一般の博物館と異なる埋文センターの特徴は、先述したように絶え間なく蓄積されてくる膨大な量の資料にある。その中で、いわゆる希少価値を有するものや、形状が完全に保たれその特徴を充分に捉えることのできる資料は、極めて限られている。しかし、いかなる資料であれ間違いなく発掘によって出土した遺物であり、過去の人々の生活や歴史を探る手掛かりとなる。収蔵する全ての資料は、歴史的価値を内蔵しているのである。したがって、歴史的価値を有する多種膨大な資料があれば、さまざまな視点からテーマを設定することができ、幅広い展示が可能なはずである。すなわち、常設展のみでなく、企画展を頻繁に開催すべきと考える。例にあげた富山県埋蔵文化財センターは、常設展を設けず年3回の企画展を繰り返しており、積極的な姿勢を持っている。企画展を頻繁に実施することは、埋文センターの展示が一過性でなく、継続的に活用されるための効果的対策となろう。

歴史的価値のある多種膨大な資料が存在しても、土器の破片や破損した石器などを単に陳列しただけでは、見学者にとって魅力のないことは言うまでもない。同様に、学術的価値の高い資料や希少価値を有するものに重々しい学術名を記しただけでは、見学者の興味や欲求を満足させることは困難である。だからといって、資料について多くの情報や知識を提示し、見学者を受け身の学習態度にさせてしまえば、〝自己教育力の育成〟を否定することになる。そこで、資料について最低限度の情報として、誰が（使用者、階層・階級・集団・個人)、い

ることを目的としているため、啓蒙活動に位置付けられる。このような活動は展示と連動させて、定期的に開催するならば効果的である。しかし、それぞれの活動を有機的に結びつけるのは容易なことではない。活動が大規模なものになるにしたがい、他との関連は希薄になりやすい。あくまでも展示を中心に考えるならば、展示解説会の定期的な実施や展示内容に直結する講演会などを、多く開催した方が有効であると思われる。

埋文センターではしばしば発掘調査の現地説明会を実施しており、これと連動させて速報展を開催するならば、埋蔵文化財や埋蔵文化財行政の啓蒙とともに、埋文センターの展示ならではの学習機能が発揮できるであろう。発掘調査中の遺物を展示に出品することは困難な点もあろうが、柔軟な対応が必要と思われる。

この他、運営面でも新たな対応が生じてくる。休館日は、富山県埋蔵文化財センターでは官公庁の休日と歩調をそろえたものになっている。附属の博物館の場合は別であるが、展示施設を有するほとんどの埋文センターも同様である。土曜・日曜に開館するのが望ましいことは言うまでもない。このことは職員配置の問題とも絡んでくるため解決は容易ではないが、福岡市埋蔵文化財センターではセンターの休館日を毎週月曜日としており、この問題の解決に先鞭をつけている。

また、施設面での充実も必要となり、例えば学習室や図書室など小規模なものであっても設けることが望ましい。こうした点は、一般の博物館と同様である。

このように、考古や歴史の地域学習の機能を重視して埋文センターの展示を位置付けるならば、展示自体の内容や方法に教育的配慮が必要になってくる。

4　展示内容と展示方法の検討

一般的な博物館における資料の収集は、目的を持って計画的に実施される。収集し登録された資料は研究がなされ、その成果を発表する主要な手段として展示が行われる。したがって博物館の展示は、資料の収集目的に対する成果を示す場といえよう。これに対して埋文センターでは、資料は保管・収蔵を目的として否応なく継続的に蓄積されてくる。富山県埋蔵文化財センターを例に見ると、平成２年現在、約25,000の木箱に納められた多種多様な出土遺物があった。そこでは、資料の収集目的に対する成果として位置付けられる一般的な博物館の展示とは異なり、否応なく収集される資料をいかに工夫して特色ある展示を展開するかが問題となってくる。

この工夫は、埋文センターの展示が埋蔵文化財や埋蔵文化財行政の啓蒙だけでなく、ひろく学習施設として機能を発揮するために行われなければならない。先に、埋文センターでは

(5)　最近の調査から

市域内の調査のうち特に成果のあったもの、または話題になっているものを取り上げた速報展示

第2展示室

市域内から発掘調査によって出土した旧石器時代から江戸時代までの遺物を時代順に配置し、各時代の土器の変遷や、石器・土製品などを展示

福岡市埋蔵文化財センターでは、第1展示室を埋蔵文化財や埋蔵文化財行政に対する啓蒙、第2展示室を考古・歴史の学習の場としており、埋文センターの特色を生かした展示をおこなっている。但し、展示の方法やスペース配分などを見ると、啓蒙に重点を置いた展示と考えられる。啓蒙と学習の両機能を併せた展示は他にもみられ、岡山県古代吉備文化センターでは177m²の1つの展示室の中で展開されている。

博物館や資料館などの展示に教育的配慮が必要か否かは、かつて多くの議論があった(2)。今日では展示を学習の対象として活用できるように配慮することは、大方の認めるところである。そして、近年では「生涯教育」あるいは「生涯学習」のシステムが各方面に広く受け入れられてきている(3)。中央教育審議会答申において生涯教育の取り組みの場に博物館があげられているのは、周知の通りである(4)。「生涯教育」の推進は、1965年のユネスコ成人教育推進国際委員会において、Paul Lengrandにより提唱されたのが契機となっている。Lengrandは、現代人はこれまでの解釈では事足りなくなるほどの大変化を呈するような、物的、知的、道徳的世界に直面させられていると指摘する。それらの社会的事象として、人口の増大、科学的知識及び技術体系の進歩、政治的変化、情報の増大、余暇活動の増大、生活モデルや諸人間関係の危機、イデオロギーの危機などをあげている。そして人が生涯にわたって当面する課題に取り組む努力を怠れば、遂には自分自身をも認識しなくなってしまうという。つまり生涯教育は知識の伝達ではなく、学び、研究し、自己学習をすることをたゆまずおこなう人間を育て、発達を図るものなのである(5)。埋文センターの展示とそれに関連する活動は、こうした生涯学習（教育）の観点からも考えなければならない。

埋文センターでの展示を考古や歴史の地域学習の場として位置付けるならば、展示に関連する諸活動を充実させる必要がある。現在各埋文センターで実施されている活動には、遺跡の見学会、講演会、考古学教室などがあげられる。これらの多くは、埋蔵文化財やその行政に対する啓蒙活動としての性格が強い。富山県埋蔵文化財センターでも、特別企画展にあわせて展示テーマに沿った講演会と、小・中学生を対象とした考古学教室を開催している。但し考古学教室は、体験を通して埋蔵文化財への知識と理解を深め、文化財愛護の心を育成す

の普及

(6) 体験コーナー　…　玉作りの体験

3　展示の位置付けと対応

埋文センターの本来の業務は、埋蔵文化財の保護と開発に伴う事前の発掘調査の遂行である。したがって、大半の埋文センターにおける現在の展示は、埋蔵文化財および埋蔵文化財行政に対する理解の推進や、保管する出土遺物を有効活用するための一手段として位置付けられている。例にあげた富山県埋蔵文化財センターは、展示室を地域における考古や歴史の学習施設として位置付けることに重点を置いている。こうした位置付けは、全国の埋文センターの中では未だ希少である。

文化庁による文化財行政の施策として埋文センターの建設がはじまった頃は、埋蔵文化財やその行政に対する啓蒙は極めて重要な活動であった。今日においても、啓蒙活動の重要性は変わらないところである。しかし、新聞やテレビをはじめとするマスメディアによって、発掘調査や遺跡の保存運動は頻繁に取り上げられるようになり、埋蔵文化財や埋蔵文化財行政は現在ではかなり社会的に認知されていると思われる。そこで今後の埋文センターの展示は、啓蒙活動からさらに一歩踏み込んで地域における考古や歴史の学習施設として、その役割を果たすような位置付けを行う必要があると考える（表２）。

福岡市埋蔵文化財センターは、啓蒙活動と学習機能の両者を重視した展示活動を実施している。ここでは、埋蔵文化財および埋蔵文化財の保存と保護を展示のテーマとし、福岡市域内出土の考古資料を２室に分けて展示している。内容は次の通りである。

第１展示室（167m²）

(1) 文化財と埋蔵文化財

(2) 発掘調査

① 遺跡を見つける

② 発掘調査の順序

(3) 遺跡と遺物の保存

① 遺物の保存処理

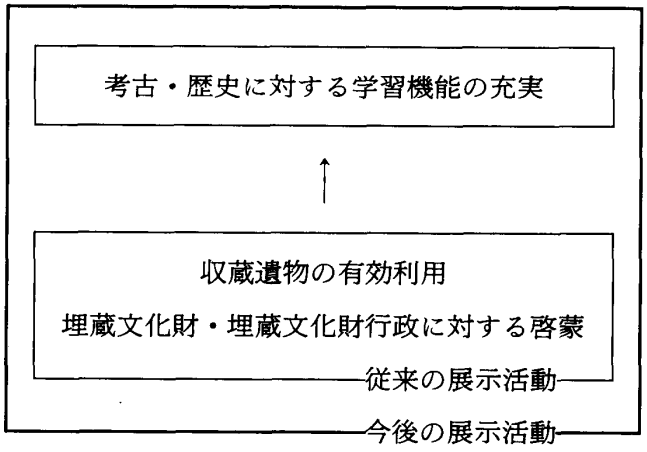
② 遺跡・遺構の保存

(4) 埋蔵文化財（考古学）の研究

① 年代を決める

② 何に使ったか

表２　埋文センターにおける展示活動の機能



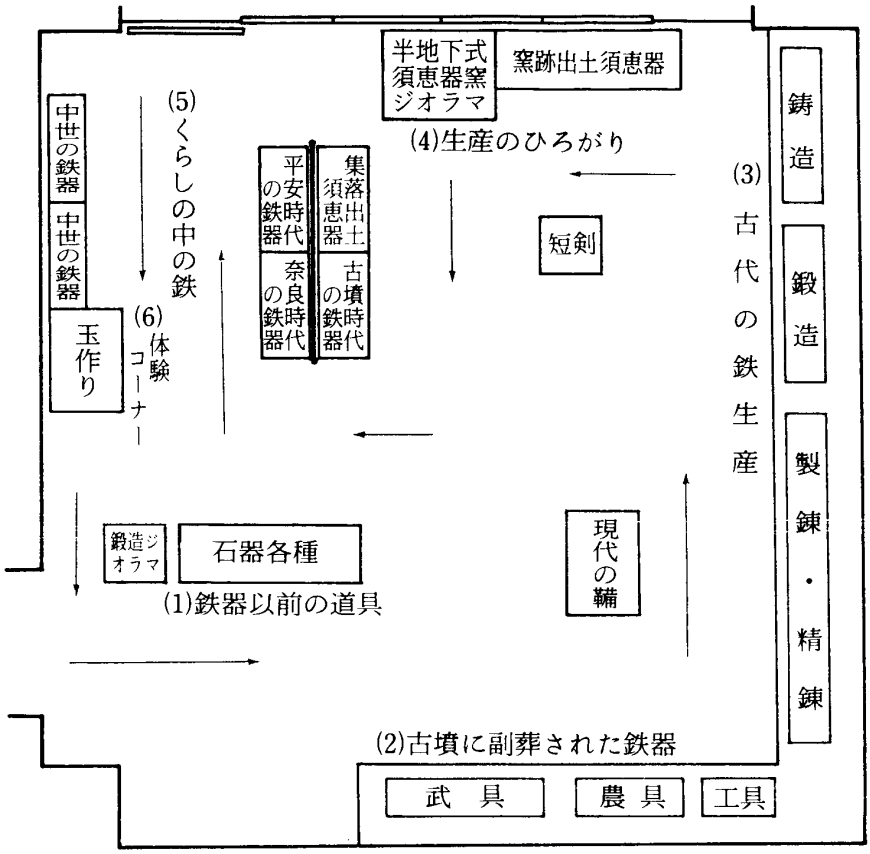


図3　「鉄の文化―県内の遺跡から―」の配置

土資料を通して、鉄を中心に拡大していった人々の生産活動の理解を図ることを目的としたものである。構成と内容は、前回の特別企画展のものを一部引き継いでいる。展示資料は、センター収蔵遺物154点、県内機関・個人からの借用資料74点の合計228点と、写真・イラスト・解説パネルなど56点（8機関より写真借用）である。

展示構成と内容は以下である（図3）。

(1)　鉄器以前の道具　…　初期の鉄器とそれ以前の道具との比較

(2)　古墳に副葬された鉄器　…　武具・馬具・農工具からみた鉄器の種類と利用方法

(3)　古代の鉄生産　…　①　鉄製品の原料と製造過程

②　鍛造に関する道具と製品

③　鋳型と鋳造製品

(4)　生産のひろがり　…　鉄生産とともに発達した須恵器生産と各遺跡から出土した須恵器

(5)　くらしの中の鉄器　…　古代の集落跡や中世の城跡から出土した鉄器などからみる鉄

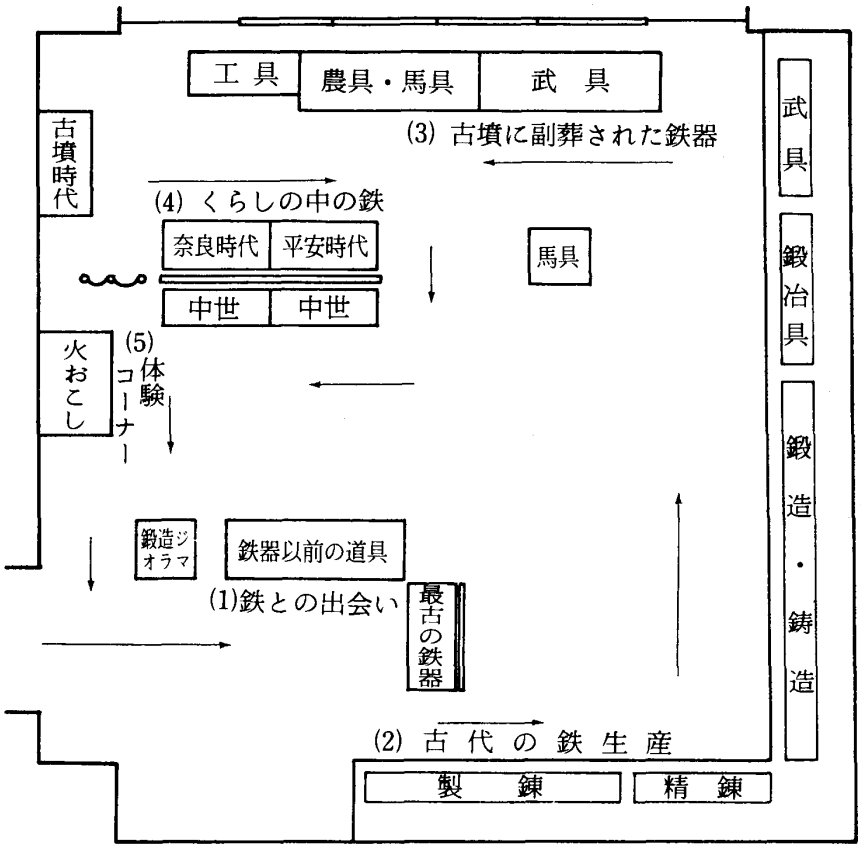


図2　「鉄―人とのかかわりと移り変わり―」の配置

を2回実施した。

展示構成と内容は次の通りである（図2）。

(1)　鉄との出会い　…　初期の鉄器とそれ以前の道具との比較

(2)　最古の鉄器　…　国内最古の鉄器と県内最古の鉄器

(3)　古代の鉄生産　…　①　鉄製品の原料と製造過程

②　鍛造に関する道具と製品

③　鋳型と鋳造製品

(4)　古墳に副葬された鉄器　…　鍛冶具・武具・馬具・農工具に使用された鉄器

(5)　くらしの中の鉄器　…　古墳時代から中世までの集落跡や城跡などから出土した鉄器

(6)　体験コーナー　…　マイギリ式による火おこしの体験

企画展「鉄の文化―県内の遺跡から―」（平成元年12月5日～平成2年3月31日）

この展示は県内に分布する鉄生産遺跡の発掘成果を中心に構成し、古墳や集落跡からの出

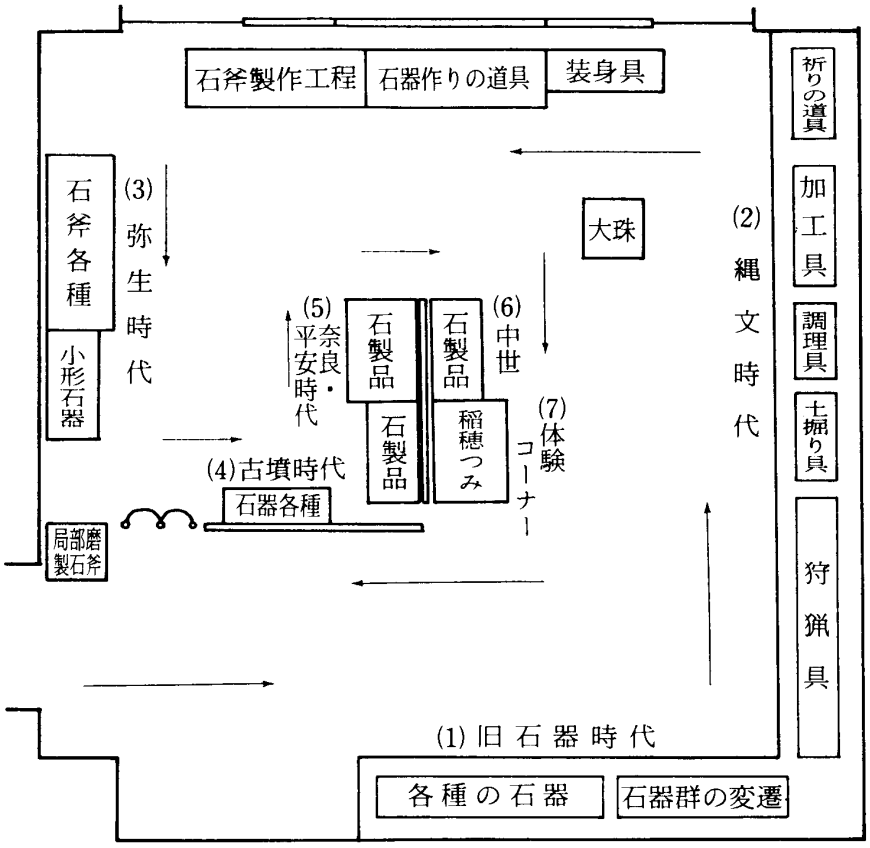


図1　「石の道具―石器にみる人々の知恵―」の配置

(7)　体験コーナー　…　石庖丁のレプリカによる稲穂つみの体験

特別企画展「鉄―人とのかかわりと移り変わり―」(平成元年10月30日～11月27日)

富山県では古代の製鉄炉跡が多数発掘されており、古代の手工業生産を解明するための貴重な資料が数多く蓄積されつつある。そこで、古代の鉄生産遺跡や弥生時代から中世までの諸遺跡から出土する鉄器を通して、鉄が社会に果たした役割や古代の人々の生活を探ることを目的としテーマを設定した。展示は鉄生産遺跡の出土資料を中心に構成し、半地下式竪形炉や精練炉のジオラマなどを配置した。さらに、古墳に副葬された鉄器や集落遺跡などから出土する鉄器を通して、各時代での鉄の持つ意味や用途を示した。特別企画展では、展示の構成上県内資料では補えない部分について、県外から資料を借用している。展示資料は、センター収蔵遺物94点、県内機関・個人からの借用資料77点、県外機関からの借用資料100点の合計264点と、写真・イラスト・解説パネルなど63点（14機関より写真借用）である。そして、展示内容の理解を深めることを目的として、開催期間中に外部講師を招聘した公開講座

行政に対する啓蒙であった。その後昭和62年10月、収蔵庫の増築と併せて199m²の展示室が開設された。本格的な展示活動はこの時より始まる。

ここでの展示は、調査・研究の成果を県民に還元する場として位置付け、学習施設としての機能の発揮を重視し、併せて埋蔵文化財行政に対する啓蒙を目的としている。展示やそれに係わる業務には、保存普及担当として２名の専任者があたる。展示は年間を通して２回の企画展と１回の特別企画展であり、企画にあわせてセンター収蔵の遺物を中心に構成する。したがって、常設展示の形態ではない。ロビーには考古学や歴史に関する概説書や小辞典など一般向けの図書が配置されており、自由に閲覧することができる。本棚の近くには机と椅子を配し、小規模な学習空間がつくられている。ここにはビデオ装置もあり、自分の好きなプログラムを選択し視聴することができる。報告書などの専門書は職員用の図書室にあり、申請により利用できる。開館時間は月～金曜日は９時～17時で土曜日は９時～12時30分、入館は無料である。日・祝日、第２・４土曜日、年末・年始は休館で、他に展示替え期間の１週間程度を臨時に休館する。但し、特別企画展中は休館日を設けず、毎日９時～17時まで開館している。

以下に、平成元年度に実施した展示について具体的に記述する。

企画展「石の道具―石器にみる人々の知恵―」（平成元年６月22日～10月20日）

富山県東部は打製石斧や磨製石斧の生産遺跡が数多く発掘されており、石斧生産地として特色を生み出している。近年では朝日町境Ａ遺跡の調査により、硬玉の生産跡が発掘され注目を集めている。そこで、石器をテーマに選んだのである。展示目的は、原始時代から中世までの時代ごとの石器の利用方法を通して、人と石とのかかわりの追究である。展示方法は、旧石器時代から室町時代までの県内出土石器を通史的に構成し、各時代の石器の製作方法や用途に主眼を置き、ジオラマやイラストパネルを多用することによって理解が深められるように努めた。展示資料は、センター収蔵遺物258点、写真・イラスト・解説パネル40点（２機関より写真借用）である。

展示構成と内容は次の通りである（図１）。

(1)　旧石器時代　…　石器の製作道具や各遺跡から出土した各種の石器

(2)　縄文時代　…　狩猟具・調理具・土掘り具・加工具・祭祀具・装身具などの石器

(3)　弥生時代　…　稲作に関連する各種の石器

(4)　古墳時代　…　祭祀に使用された石製品

(5)　奈良・平安時代…　鉄が普及した中でも使用されていた石器

(6)　中世　…　製品として流通した石器

展示に係わる諸活動をみると、苫小牧市埋蔵文化財センターや群馬県埋蔵文化財センターなどでは、施設内における展示とは別に巡回展示会を実施している。巡回展は展示空間を設けていない埋文センターの多くで定期的に開催されているが、展示空間を確保している機関であってもそれが小規模である場合は実施しているようである。言い換えるならば、施設内にある程度の規模の展示場を設けると、巡回展を開催しなくなる場合が多いといえる。他に富山県埋蔵文化財センター、滋賀県埋蔵文化財センター、福岡市埋蔵文化財センターなどでは、企画展の開催に合わせて講演会の実施や図録の刊行をおこなっている。さらに、東京都立埋蔵文化財センターや枚方市文化財調査研究会などでは、考古学教室や体験教室を開催している。考古学教室の内容は遺跡や発掘現場の見学を主とし、体験教室は土器づくり・石器づくり・火おこしが中心で、発掘調査への参加や原始時代の道具での調理といったものもある。全体的にみると、一般の博物館や資料館で実施されている普及活動と比較して、あまり遜色はないと思われる。

以上の他に、博物館を併設する埋文センターが8機関存在する。列記すると、

釧路市埋蔵文化財調査センター　　山梨県埋蔵文化財センター
長野市埋蔵文化財センター　　三重県埋蔵文化財センター
奈良市立橿原考古学研究所　　京都府埋蔵文化財調査センター
㈶京都市埋蔵文化財研究所　　㈶北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

である。そして、山梨県立考古博物館や奈良市立橿原考古学研究所附属博物館、北九州市立考古博物館などは、埋文センターと連携しながらも、機能的には独立した考古専門の博物館として活動している。

2　展示活動の具体例―富山県埋蔵文化財センター―

埋文センターにおける展示活動の具体例として、富山県埋蔵文化財センターを取り上げる。ここは専用の展示室を持ち、年3回の企画展を開催して展示テーマに合わせた講演会の実施や図録の刊行をおこなっている。私は平成元年度にここで展示を担当する機会があり、活動を実践することができた。富山県埋蔵文化財センターを具体例として取り上げる理由は、こうした点からである。

富山県埋蔵文化財センターは、昭和52年6月に都道府県立の埋文センターとして全国で最初に発足した。当初、展示空間には約20㎡の小部屋があてられていた。内容は、寄贈資料と発掘調査による主要な出土遺物の陳列であった。さらに、10日間程度を会期とした巡回の考古資料展を年1回開催し、発掘調査の成果を発表していた。展示の目的は、主に埋蔵文化財

展示スペースについてみると、ほとんどは特定の部屋を与えられているが、中には廊下・ロビー・ホール・収蔵庫などの一部をあてている場合もある。屋内だけではなく屋外展示を実施しているものもみられ、東京都立埋蔵文化財調査センターでは「縄文の村」と名付けた遺跡庭園をつくり、高槻市立埋蔵文化財調査センターは復元住居と横穴式石室を移築し、香川県埋蔵文化財センターでは竪穴住居の復元をおこなっている。

屋内展示空間の面積は、26機関が明記されている。それらを抽出し、50m²を単位に分けると、

50m²以下 ……6機関（23.1%）　51～100m²……5機関（19.2%）
101～150m²……5機関（19.2%）　151～200m²……5機関（19.2%）
251～300m²……3機関（11.5%）　301～350m²……1機関（ 3.9%）
450～500m²……1機関（ 3.9%）

となる。広さの平均値は約145m²であるが、100m²以下の小規模なものが全体の40%以上を占める。空間を最も広くとっているのは多賀城市埋蔵文化財調査センターで、約471m²の展示室は常設展示室と企画展示室とに分けられており、多賀城に関係する資料を中心としてジオラマを多用した展示が展開されている。展示空間が概ね150m²以上の施設では、ある程度の空調施設は配備され、展示環境は整えられているようである。これに対して、小規模な場所では展示環境について特に配慮はなされておらず、そのために鉄器・木器・漆器・紙類などの劣化しやすい資料の出品は好ましくなく、展示資料に制約が生じている。

展示内容と方法については、時代別あるいは時代順に配列した常設展示が多くを占めている。これに対して、発掘調査の速報展として資料を随時替えた活動をおこなっている機関がある。石川県立埋蔵文化財センターと印旛郡市文化財センターは最新の調査成果を展示し、君津郡市文化財センターでは月毎に内容を替え、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターは年3回の調査成果展を実施している。このような速報展は、調査体制と直結した埋文センターならではの特色ある企画といえる。他に、速報展も含めて企画展を開催しているのは10機関ある。そのうち、東京都立埋蔵文化財センターと滋賀県埋蔵文化財センターでは、毎年異なったテーマをたてて展示を設営し内容を変化させている。富山県埋蔵文化財センターは常設展を設けず年間3回の企画展を常時開催しており、島根県埋蔵文化財センターも同様な活動をおこなっている。企画展だけで運営する展示は、一般の歴史系博物館や資料館ではあまり試みられておらず、斬新な方法といえる。埋文センターでは、常時進められている発掘調査によって資料が随時蓄積されてくるため、展示替えを頻繁に行うことは比較的可能である。そして資料に対する研究が進めば、テーマを替えた企画展の開催を続けることができる。

表１　埋蔵文化財センターにおける展示活動

機　　関　　名	展示スペース	展示の内容・方法	展示に係わる諸活動
苫小牧市埋蔵文化財センター	１階廊下	時代別の展示	埋蔵文化財移動展示会、体験考古学教室などの実施
岩手県立埋蔵文化財センター	玄関ロビー 特別収蔵室	時代順の展示 秀品の展示	
㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	56㎡	時代別の展示	
秋田県埋蔵文化財センター	約191㎡	時代別の展示	
多賀城市埋蔵文化財調査センター	約471㎡	常設展示と企画展示	常設展示解説書と企画展パンフレットの刊行
群馬県埋蔵文化財調査センター	展示普及室	常設展示	出土文化財巡回展示会の実施
㈶茨城県教育財団本部調査課	82.8㎡	整理中の遺物や遺跡の写真	
埼玉県立埋蔵文化財センター ㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団	68㎡	出土品のうち代表的な資料	
㈶千葉県文化財センター	80㎡	時代別の展示	
㈶千葉市文化財調査協会	284.5㎡	常設展示	
㈶市原市文化財センター	10㎡	国分僧寺・尼寺関係遺物	
㈶君津郡市文化財センター	33㎡	月毎に展示内容を変える	
㈶長生郡市文化財センター	約30㎡	時代別の展示	
㈶印旛郡市文化財センター	48㎡	調査に伴う最新資料の展示	最近資料巡回展の実施
㈶山武郡市文化財センター	25.75㎡	時代別の展示、パネル展示	
東京都立埋蔵文化財調査センター ㈶東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター	158.8㎡ 遺跡庭園 「縄文の村」	毎年異なったテーマで展示	土器づくり教室の実施 パンフレットの作成
神奈川県立埋蔵文化財センター	330㎡	時代別の展示	「かながわの遺跡展」の実施
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所	40㎡	出土資料の展示	
磐田市埋蔵文化財センター	エントランスホール	出土資料を随時替えながら展示	夏休みを中心に企画展の実施
愛知県埋蔵文化財センター ㈶愛知県埋蔵文化財センター	約110㎡	出土資料	県民対象の埋蔵文化財展を年２回実施
富山県埋蔵文化財センター	199㎡	テーマ毎、年３回の企画展	パンフレット、図録の刊行 展示にあわせた講演会の実施
石川県立埋蔵文化財センター	第１収蔵庫	最新の調査成果の展示	
滋賀県埋蔵文化財センター ㈶滋賀県文化財保護協会	120㎡	毎年テーマをきめた常設展示と企画展示	企画展示期間中に、体験実習や講演会の実施
守山市立埋蔵文化財センター	ホール	市内出土の遺物	
長岡京市立埋蔵文化財調査センター	約170㎡	時代順の常設展示	発掘調査の速報展を実施
奈良市埋蔵文化財調査センター	収蔵展示室	遺跡別の展示	毎年秋に平城京展を開催
高槻市立埋蔵文化財調査センター	ホール・ロビーと野外	時代順の展示 復元住居と横穴式石室の移築	
堺市立埋蔵文化財センター	収蔵室	時代別の展示	
㈶枚方市文化財研究調査会	ロビー	出土遺物の展示	土器作りの実施
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所	142.5㎡	文化財保護強化月間にあわせての埋蔵文化財展	展示会パンフレットの作成 将来的には常設展示を予定
鳥取県埋蔵文化財センター ㈶鳥取県埋蔵文化財センター	約91.1㎡ 屋外展示場	年２～３回の企画展	
岡山県古代吉備文化財センター	177㎡	常設展示	
山口県埋蔵文化財センター	144㎡	常設展と企画展	
香川県埋蔵文化財センター ㈶香川県埋蔵文化財調査センター	272㎡及び野外	瀬戸内海交流の歴史の展示 竪穴住居の復元	
福岡市埋蔵文化財センター	294㎡	時代順の展示	図録の刊行
宮崎県総合博物館埋蔵文化財センター	約133㎡	年３回の調査成果展	

埋蔵文化財センターにおける展示活動の課題

駒　見　和　夫

はじめに

遺跡の発掘調査や、埋蔵文化財の保管・収蔵・調査・研究・活用、調査技術の向上を図ることを主目的とした機関に、埋蔵文化財センターがある。1974年に奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターが設立され、その後文化財行政の行政施策の重点として、文化庁の埋蔵文化財センター建設費国庫補助制度により、公立埋蔵文化財センターが建設されるようになった。現在では、国公立の埋蔵文化財センター32、財団・社団の公益法人組織の埋蔵文化財センター41が活動している。埋蔵文化財行政は、遺跡保存のための協議が最優先である。協議の後、やむをえず開発に伴う事前の発掘調査が行われ、蓄積されていく遺物はどこも予想を超える勢いで増加している。

埋蔵文化財センター（以下埋文センターと略す）において、一般に開放した展示施設（空間）を設けているところは、全体の約半数を占める。近年では、収蔵・保管遺物の公開や調査・研究成果の社会への還元手段として、展示活動を積極的に位置付けようとする動向が見られるようになってきた。ところが、考古資料を扱う埋文センターの展示は、資料の羅列と若干の説明だけによって展示が構成され、陳列的状態にとどまっている場合が多い。このことは学芸員の配置の問題とともに、展示活動の位置付けや展示方法の検討が未だ不十分なことによると思われる。

本稿では、埋文センターにおける展示活動の現状について把握し、その中での課題について検討を行い、今後の在り方について考えたい。

1　埋蔵文化財センターにおける展示活動の現状

全国の埋文センターの中で、建物内に展示のための空間を確保し、展示活動を実施しているものは36機関存在する。表１はその一覧である[1]。